



メイドから  
母になりました 2

---

夕月星夜  
Seiya Yuzuki

RB

レジーナ文庫



### 王太子

前のリリーの雇用主。  
やり手の美青年だが、  
妻のことになると  
暴走しがち。

### 王太子妃

元伯爵令嬢で、リリーが昔  
仕えていた家のお嬢様。  
リリーのことが大好き。

### ルーカス

レオナルドの  
同僚の魔法使い。穏やかで  
親切的な性格をしている。

### ロードス

レオナルドの同僚の魔法使い。  
彼とは学生時代からの知人だが、  
因縁があるようで……？

### リリーの母

下町で飲食店を営んでいる。  
きまつ気風がよく、たち歯に衣着せぬ性質。

### シド

レオナルドと契約している精霊。  
ちょっと口は悪いけれど、  
気のいいお兄さんの存在。

### ジル

レオナルドの養女。リリーのことを  
守れるようになるため、  
魔法使いを目指している。  
賢くて健気な6歳児。

### レオナルド

ジルの養父で、リリーの<sup>あふ</sup>主。  
凄腕の魔法使いなのだが、  
天然なところがあり、  
無意識にリリーを  
とまどわせることも。

### リリー

異世界に転生した元女子高生。  
レオナルドに頼まれジルの  
『母親役』を務めている。  
いつもハキハキとした敏腕メイド。

登場人物  
紹介

## 目次

メイドから母になりました 2

番外編

兄から伯父おじになりました

書き下ろし番外編

母から祖母になりました

351

325

7

メイドから母になりました 2

## 一 里帰りとうちのご飯

『ごめんね』

少し高い子供の声が聞こえた。

『ごめんね、ボクに力がなくて』

鮮やかな金の髪を持つ少年が手を伸ばす。その手の先にいるのは、高校の制服を纏った黒髪の少女。顔を覆って泣く彼女の頭を、少年は悲しそうに顔をしながら何度も撫でていた。

この光景を、私は知っている。これは前世の『私』が、死んだ直後の記憶だ。

そもそも『私』が死んだ原因は、神様たちの喧嘩だったらしい。詳しくは教えてもらえなかったけれど、まさかその喧嘩の余波が別の世界に影響を与えて、人の命を奪うことになるとは思わなかったと『私』の頭を撫でる少年——神様に言われた。だから神様は、『私』を生き返らせるために、精一杯力を尽くしてくれた。でも、前世の『私』

を無傷で生き返らせることはできなかったそうだ。

いくら神様でも、時の流れには逆らえない。止まった命を再び動かすことは、自然の摂理に反する。無理矢理生き返らせた場合、限りなく死に近い状態での生還になり、一生植物状態のままかもしれないと宣告されてしまったのだ。

前世の『私』の家は貧乏だった。その上、まだ小さな弟と妹がいて、とてもじゃないがそんな状況の『私』を生かすためのお金なんかない。当時付き合っていたあの人なら、俺がなんとかするって言いそうだったけど、その人もまだ社会人になりたてだったし、頼ることはできなかったんだ。

大好きなみんなが聞けば、きつと生きろって言って怒っただろう。でも、迷惑をかけたまで生きようとは思えなかった。

だから、あの時の選択——一度死んで生まれ変わる道を選んだことを、後悔はしていない。だけど、あのまま生きていたかった気持ちも、確かにあった。あの人と幸せになる約束を果たせなかったことが、今も深く心の傷となっていて残っている。

私が前世の記憶を残して苦しむ代わりに、神様は大切なみんなの幸せを約束してくれた。それだけが私の救い。

それでも、今は。

——リリー。

「レオナル様」

今の私の、大事な人の声が聞こえる。私を呼ぶ声は、とても優しい。霞んでいく光景に、そっと目を閉じる。

『——幸せになつてね』

遠のく意識の片隅で、あの時、神様が最期にくれた言祝ぎが聞こえた。

目を開くと、すっかり見慣れた天井が見える。夢の名残の、優しく切ない気持ちでぼんやりと宙を眺めてから、私はゆつくりと体を起こす。

そして、隣ですやすやと眠る愛娘、ジルの顔を薄明りの中で見つめてそっと微笑みを浮かべた。

天使みたいにあどけない整った顔立ちに、ふわふわしたストロベリーブロンド。閉ざされた瞼の下には、晴れ渡る空の青色を溶かしたような大きな瞳が隠れている。ジルは楽しい夢でも見ているのか、幸せそうに顔を綻ばせていた。

転生という選択肢を受け入れ、リリー・ルージャヤとして、この魔法が存在する世界に生まれて十八年。

私は現在、多くのふたつ名を持つ優秀な王宮魔法使い——レオナル・マリエル様のもとでメイドとして働いている。

何故なら、レオナル様がジルを養女として引き取るにあたり、母親を必要としたから。

ジルの本名は、ジゼル・クロツズ。元々は子爵家の娘だったジルは、強すぎる魔力を暴走させつつ、三歳の頃から三年間、実家で幽閉のような生活を送っていた。

そんなジルが王宮魔法使いたちに保護されたのは、約一ヶ月前のこと。ジルの魔力があまりに強大だったので、その制御ができる、強い魔力を持つ魔法使いが保護者となるしかなかったそうだ。そこで選ばれたのがレオナル様なのだけれど、レオナル様には奥様も恋人もない。それで、誰か母親役をする女性が必要だった。

女性が苦手なレオナル様が、ジルの母親役を依頼したのが私だった。私がレオナル様に恋愛感情を持たないからという理由で。

つまり、私がジルの母親役を始めたきっかけはお仕事。でも、今はそれだけじゃない。感情を表すのは苦手だけど、とても優しいレオナル様と、可愛くて健気なジルとは、仕事なんて関係なく一緒にいたいと思っている。レオナル様は私を使用人じゃなく家族として扱ってくれるし、ジルもお母さんと呼んで慕ってくれるんだもの。愛しいと

思うじゃない？

それに、レオナルド様が契約する精霊さんたち——闇のシンドさん、風のアムドさん、水のミリスの三人とも仲良くなれた。

レオナルド様の友人で同僚の、ウイレムさんやセドリック君にも認めてもらえている。長年疎遠そとんになっていたお兄ちゃんとも、レオナルド様のおかげで仲直りできたし、私はとても幸せな毎日を過ごしているのだ。

——今朝みたいに、前世を思い出して切なくなる時以外はね。

「それにしても、起きるの遅かったかな」

窓の外がいつもより明るいことを確認して、少しだけ落ち込む。いや、寝坊したからじゃない。今日から数日はレオナルド様がお休みだから、朝はゆっくりでいいと言われる。けど、習慣は崩したくないんだよね。

ジルを起さないよう静かに身支度みじたくを整える。部屋に置かれた小さな鏡に映るのは、黒髪黒目だった前世とは違って、茶色の髪と目をした自分の姿。前世の記憶を持つても、今の私はリリー・ルージュヤとして生きている。そんな当たり前のことを再確認してしまうのは、きつと夢のせいなんだろうな。

物悲しい気持ちを自嘲じちやうするみたいに笑って、一度目を閉じる。感傷ひじに浸るのはここま

でにして、朝ご飯を作らなくちゃ。

頭を振って気持ちを切り替えてから、キッチンに向かう。今日はレオナルド様がお休みで、朝食の支度に時間がかけられるし、パンケーキにしよう。

私が転生したこの世界は、魔法があったり、移動手段が馬車だったり、前世と違って思いっ切りファンタジーな世界。だけど、前世と似ている部分もたくさんある。そのひとつが食材。ほぼ同じものが流通しているし、野菜とかの名前は一緒だから楽なんだよね。パンケーキに使うベーキングパウダーも、ちゃんと食料品店に売っている。さすがに初めて見た時にはびっくりした。まあ、あるならありがたいってことで、使ってます。

ちなみにパンケーキの材料は、卵と薄力粉はくりきこと牛乳と砂糖です。あとベーキングパウダーね。

かなりシンプルだけど、ソーセージやベーコン、ジャムとかと一緒に食べるから、ふわっふわのスフレみたいなやつじゃなくていい。……そういうものも、レシピは知っているし、作ったことあるんだよ？ 別に、作れないってわけじゃないんだからね。

そうして私が朝食作りをしていると、ふいにレオナルド様から声をかけられる。

「おはよう、リリー」

「おはようございます、レオナルド様？」

振り返って挨拶を返したとたん、驚いて口ごもっちゃった。

思わず見惚れる白皙の美貌と、腰までの長さがある黒髪はいつも通り。ただ、着ている服がいつもと違っていた。今朝のレオナルド様は普段の長いローブ姿ではなく、シンブルなシャツとズボンという、魔法使いっぽくない恰好をしている。

だから、珍しくてまじまじと見つめてしまう。

「なに？」

「その姿、初めて見るなと思います」

「ああ……たまにはこういう恰好もおかないと、着方を忘れる」

「普通、忘れないと思うんですが」

普段、ローブの下になにを着ているんですか？ 素肌の上に直なの？ ……いや、レ

オナルド様の洗濯物を見る限り、そんなことはないはず。

私が悩んでいたら、レオナルド様は首を傾げた。

「変？」

「いえ、変ではありません。カッコいいです。そうしていると、魔法使いじゃないように見えるので新鮮ですね」

うん、本当にかっこいい。ズボンもシャツも体の線に沿う造りなのでわかるんだけど、レオナルド様、腰細い!! でも、細いなりに全身にしっかり筋肉がついてるんだよね。無駄のない筋肉っていうのかな。

でも、惜しむらくは髪形が合っていないことかも。いつものローブなら下ろしっぱなしで問題なかったけど、今日の恰好だと、重たい印象になってしまっている。

「レオナルド様、髪を結んでもよろしいですか？」

「髪？」

「ええ、その方がいいと思います」

「……リリーが言うなら」

じゃ、失礼して。レオナルド様は背が高いので背伸びをしつつ、持っていたリボンで軽くひとつに結んでみた。風の強い日にリボンを飛ばされたことがあって、それから必ず予備を持ち歩いている。

レオナルド様の黒髪は、しなやかでサラサラしていて、触り心地がいい。

この世界において、黒髪は強大な魔力を持つ証として畏怖されている。特に黒髪の子供は、魔力を暴走させるかもしれないから疎まれたり恐れられたりすることが多い。けれど、私は懐かしくとも綺麗だなと思わなかった。前世では、私も同じ色の髪

だったもの。

それにしても、こうして髪を弄らせてもらえるとすることは、レオナル様は私をそこそこ信用してくれているって思っているのかな。髪に触られるのって、親しい相手じゃないと無理だもんね。

「はい、できましたよ」

「ん……動きやすいな」

「髪を結んでいますからね。体に纏わりつかない分、動きやすいんだと思います」

「なるほど……いいな、これ」

今まで、髪を結んだことがなかったのかな？ レオナル様は結構気に入ったみたいで、しばらく結った髪を弄っていた。しかし、ふいに私の方を向く。

「そういえば、リリーは違う髪形にしないの？ いつも同じだよな」

「ああ、これが一番動きやすいですから。寝る時はほどいていきますよ？」

「……見てみたいって言ったら、怒る？」

「怒りはしませんけど……見たいのは、ほどいた姿ですか？ それとも、別の髪形ですか？」

前者はできればお断りしたいところです。基本的に、髪のを下ろしている自分が好

きじゃないんだよね。でも、ただ違う髪形が見たいというだけなら、それは別に問題ない。

「レオナル様がお望みなら、髪形を変えるのは構いません。元々は、メイドとして家事をするための髪形ですからね。こだわりとかないですよ」

「じゃあ、明日出かける時は、違う髪形にしてくれる？」

「何故そんなに見たいのかわかりませんが、はい。……明日？」

急に言われて驚いちゃった。明日、出かける予定なんて入れてなかったよね？ 私が目を丸くしていると、レオナル様があっさり言う。

「ん、明日ジルも連れて三人で行こうかと。リリーの実家」

「ああ、なるほど。わかりました」

確かに先日、実家に行きたいからお休みをくださいってお話しした時、レオナル様もついていきたいなんて言ってたっけ。それにしても明日か。どうやって実家に行くとか、色々と予定を立てておかないとな。

会話をしつつ手は動かしていたので、朝食の準備はほとんどできている。あとはパンケーキを焼くだけ。パンケーキに添える用のバターと、泡立てた生クリーム、ラズベリージャム、蜂蜜も別皿に用意した。ソーセージにベーコン、スクランブルエッグとサ

ラダも作ってある。

「そろそろ朝食にしますか？」

「ん」

訊ねたらレオナルド様が頷いたので、私はみんなの分のパンケーキを焼き始めることにした。多分、焼いている間にジルと精霊の三人も起きてくるだろう。

それから数十分後。

ふかふかのパンケーキをたくさん焼いた私は、最後に焼いた自分の分を持ってリビングに向かった。そこでは、すでにレオナルド様とジル、シドさん、アムドさん、ミリスの五人が食べ始めている。

あ、レオナルド様は食べ終わっちゃっているみたい。うーん、ちよつと残念かも、できれば一緒に食べたかった。けど、せっかくなら焼き立てを召し上がってもらいたいし、こればっかりはなあ。

そんなことを思いながら席についた私に、水の精霊のミリスが水色の瞳を輝かせて話しかけてきた。

「リリー、これ美味しいですわ!! なんのジャムですか？」

「それはラズベリーだよ。イチゴより酸味が強くて、私は好きなの」

「私も好きになりましたわ!!」

にこにこ食べているミリスは、隣のジルと同じ幸せそうな顔をしている。こういう姿を見ると、精霊さんだって信じられないくらい人間っぽいって思っちゃう。凄く可愛い。

「俺も好きだ」

そう言ったのは風の精霊であるアムドさん。口数はそれほど多くなくても、わずかに細められた緑のまなざしや綻<sup>ほころ</sup>んでいる唇から、本当にそう思っているのがよくわかる。結構がっしりした体格で小さく切ったパンケーキを食べている様子が、ちよつと可愛い。ミリスと並ぶと美男美女で眼福<sup>がんぷく</sup>だなあ。お似合いだから、早くくっつけばいいのに。

「甘いのも酸味が強いのがいい」

「確かに美味<sup>うま</sup>いが、俺はちゃんと飯<sup>めし</sup>って感じの方がいいな」

アムドさんの眩<sup>くら</sup>きに、自分の意見を言うシドさんは、ソーセージを巻いて食べていた。短い銀髪にレオナルド様と同じ金の瞳という外見からは信じにくいけれど、シドさんは闇の精霊。

「ベーコンも合いそうだぜ?」

「確かにそうですね」

一般的に男性は甘いのが好き、しょっぱい方が好きだもんね。でも、甘いのも美味しいって言うてくれたのは嬉しい。どちらも用意しておいてよかった。

さて、私も一口……ん、美味しい。個人的には、バターと蜂蜜はちみつが好きかな。ラズベリーとホイップクリームも美味しいけど、やっぱりオーソドックスっていいよねえ。

半分くらい食べ進めたところで、先に食べ終わったミスがお皿を片付けつつ話しかけてくる。

「そういえば、明日どこかに行くんですの？」

「うん、レオナルド様とジルと、ちょっと実家に行くことになったの」

「そうです。なら明日はなにを着ていきますの？」

「なについて……普通に今着ているみたいな、ブラウスとスカートだけど？」

答えたたん、ミスはもの凄く渋い顔をした、え、駄目？ 休みでも、いつもそんな恰好ばかりなんだけど。着回しがしやすい服が好きなんだよね。

「駄目ですわ！ せっかくですもの、お洒落しゃれをしないと!!」

「いや、でも服を持ってないから」

「でしたら買いましょ!! マスター、それでいいですわよね？」

ちよ、ええっ、レオナルド様を巻き込んだよこの子。

でも、そんな無駄金をレオナルド様が使うはずない、よね？

私が慌てて止めるよりも早く、ミスはレオナルド様を説得にかかる。

「外出用の服も買えないくらいのお給料だって、ご実家のご家族に思われてしまったては、マスターの不名誉ふめいよになりますわよ」

「ん、そうだね」

レオナルド様、納得したー!? どうして言うてくるめられちゃってるんですか……

そもそも正式な契約が完了してないから、まだお給料は王家から支払われているんだけど。

「リリーがドレスを着るのを見たい。今日、一緒に買いに行こう」

「へ？」

「……駄目？」

えー、なんで子犬みたいな目で見るの。う、うう、どうしよう、断ったら面倒なことになる予感が……仕方ない、今回は領いておくか。

「……わかりました」

「本当？」

うわ、なにその笑顔。そんなに嬉しそうな顔しなくても……な、なんかこつちが恥ずかしくなっちゃってきちゃう。ああ、ミスとシドさん、アムドさんの三人が、驚きのあまり持っていたものを落つこととした。

「……明日、雨か？」

「雪かもしれないぞ」

「もうなにか降っても驚きませんわ」

ちよ、精霊さんたち、そこで内緒話しないで。聞こえてる、聞こえてるから!!

「じゃあ、これからリリーの服を買いに行く」

レオナルド様が言い切ると、ミスがキラキラした顔で挙手した。

「なら、私が護衛につきますわ」

「……案外、自分が服を見たいだけだったりしてな」

「ち、ち、違いますわ!! シドの意地悪!!」

ああ、うん、見たいんだねミス。でも、一人で服屋さんに入る勇気がないから、私をダシにしたいのね。

「お父さん、ジルは？ おるすばん？」

こてりと首を傾げたのはジル。今日は白地に水色の刺繍ししゅうを施ほどこしたワンピースに、ピン

クがかった金の髪をふわふわと自然になびかせている。まるで天使みたいに可愛い。

レオナルド様はジルの頭を優しく撫でて、顔を覗き込んだ。

「できるか？」

「うん！ シドさんもアムドさんもいるなら大丈夫！」

それに、とジルは満面の笑みを浮かべる。

「でーとのじゃましちや、駄目なんだよ？」

……うん、待って。誰よ、そんな言葉でジルに教えたの。思わず噴ふき出しかけたじゃない。レオナルド様が咽むせちやってるじゃん!!

「ジ、ジル、デートだなんて、どこで聞いたの？」

「え？ この前、まちにお買い物に行った時、シドさんにおねえさんが言ってたよ？」

『こんどでーとしてくれるって言ったのに』って。それで、でーとってなにしてシドさんにきいたら、おとこのひととおんなのひとが二人きりで出かけることだって教えてくれたの」

ジルの答えに、私とレオナルド様は揃ってシドさんに冷たい目を向けた。

「シドさん……」

「シド、子供の前で教育が悪い」

「いや、デートの意味を教えるくらい、いいだろ!!」  
シドさんはオロオロしている。でも、気になるのは、今度デートするって約束のかわ。

確かにシドさんにはレオナルド様とは系統が違う、男性っぽい魅力がある。短い銀の髪に金の瞳は目を引くし、少し着崩した服もよく似合っていて色気たっぷり。なのに、すつごく優しいので、頼れるお兄ちゃんみたいな感じもある。だから女の子にモテモテなのは、私も知ってるけど。

「シドさんってば、女の子に気を持たせておいて……」

「なんだよ、はっきり言えよ」

「じゃあ言います、最低」

私の言葉にシドさんが思いつ切り凹くぼんだけど、そこはスルーで。

「お父さん、お母さん、でーとたのしんでね」

「いや、デートじゃないのよ、ジル。それは違うの」

「二人でお出かけだよね?」

「ミスも一緒だからね? 違うの、違うから」

といつても、恋愛の機微きびを六歳の子供に説明して、理解できるはずもない。ああもう、

本当にシドさんってば余計なことを!!

ジルの誤解をとけないまま朝食を終えたあと、私はレオナルド様とミスに引きずられるようにして町に出た。やってきた先は、女性向けの既製服を売っているお店。いくつかのドレスを見比べつつ、小さく息を吐き出す。

「うーん……」

入店してからずっと、私はミリスの着せ替え人形にされていた。まあそれはいいんだけど、ミスがすすめてくれる服は、ちょっと私のイメージとは違う気がする。

「リリー、可愛いですわ!」

目をキラキラさせつつ私に服を当ているミス。その手には、鮮あざやかなオレンジと黄色の服が握られている。

「そうかなあ、もう少し大人しい色の方が——」

「まあ、そんな駄目ですわ! せっかく女の子に生まれたんですもの、もっと明るい色で華やいだ服を着た方がいいはずです」

いや、それとこれは別問題だと思う。そもそも私みたいな平凡な顔には、こんな服は痛いって。

「マスター、可愛いと思いませんか？」

「んー……」

ほら、レオナルド様も首傾げちゃってるじゃん。これは失敗だつて。

反応がいまいちなレオナルド様に、ミスはちよつと唇を失らせている。

「では、マスターならどんな服を選びますの？」

「僕なら、それ」

レオナルド様が示したのは、壁にディスプレイされていた青いドレス。

色は綺麗だけど控えめだし、デザインもシンプルで着やすそう。少し広めのえりぐりには、流行りの繊細なレースがついている。正直言つて、凄く好み。というか、レオナルド様って本当にセンスいいよね。

「綺麗な青ですわね。晴れた南の海はこういう色ですわ」

「それから、あれとこれと、それ」

ミスが弾んだ声で言うと、レオナルド様は立て続けに三着のドレスを指差した。

ひとつ目は淡いレモンイエローの、女性らしい柔らかなシルエットのドレス。微かに膨らんだ肩以外に目立つ特徴はないけれど、その分、小物をつけることで印象を何通りにも変えられそう。

ふたつ目は、暗い緑色のシックなドレス。胸の上から肩までが、細かいレース地でできていて透けているデザイン。スカートにも同じレースが飾られていて、ちよつと着るのに勇気が必要な感じ。綺麗だけどね、これを着こなせるほど胸がないです。

最後はピンクベージュと、艶やかな深い茶色のドレス。これ好きだな、大人っぽくて落ち着いているけど、可愛さもある。

つい見入ってしまった私に、レオナルド様が声をかけてきた。

「気に入ったのがあれば、全部買うから」

「え？ いや、さすがにそれは……」

「一着だけあつてもどうしようもない。七着くらい買う」

「お金の無駄遣いはやめましょうよ、レオナルド様」

つて、気が付いたら、さつきレオナルド様を選んだ四着、もうお会計済まされてる……待つて、本当に勘弁して!!

「こんなに買っていただくのは、申し訳ないです」

「今までのお給料の代わり」

「ちゃんと王家からお金で貰ってましたから!!」

「じゃあ、ご褒美」

「もう充分です。レオナルド様と一緒にいられるのが、一番のご褒美ですから!!」  
 私が慌てて言った瞬間、レオナルド様とミリスどころか、店中の人たちが沈黙してしまつた。

「……あれ？　なんで黙るの？　何故、店内がシーンってなっているの？」

わけがわからずキョロキョロする私に、レオナルド様が心なしか赤い顔で言い出す。

「……ありがとうございます」

「え？　あ、はい？」

どうして私、お礼を言われているの？

レオナルド様は小さく咳払いをして普段通りの無表情に戻つたので、それ以上は突っ込めなかった。とまどう私に、レオナルド様が苦笑する。

「年頃の女性らしいリリーを見たいって言つたら、駄目？」

「普段は女性らしくないですか？」

「そうじゃなくて……その」

口ごもるレオナルド様に首を傾げていると、彼は困つたように微笑んだ。

「いつも『母親』で『メイド』のリリーだから、私服くらい『女の子』でいてほしい」

「あー、つまり、私服が仕事着にしか見えないと」

「というより、いつもと違うリリーを見たい」

今朝の髪形の話といい、今日のレオナルド様は、いったいどうしたの？

「僕のワガママに、付き合つて」

「……綺麗な服は嬉しいです。でも、こんなに買っていただけでも、嬉しさより申し訳なさが勝っちゃうんです」

素直に言つたら、また苦笑された。でも、レオナルド様の瞳はとて優しい。

「仕方ないね。でも、もう支払いをした分は諦めて？　それで明日、新しい服で出かけよう」

「わかりました。……ありがとうございます、レオナルド様」

あんまり遠慮をしすぎたら、レオナルド様も気を悪くするかもしれない。申し訳ないけど、お言葉に甘えさせてもらおう。さっきも言つた通り、嬉しいのは本当だもの。

ほっこりとしている私に、レオナルド様は「どういたしまして」と言つて笑う。次の瞬間、レオナルド様がふと他のドレスに目を留めた。

「あ、これも似合いそう。リリー、着てみて」

「いやいや、それまた新しい服ですよ、レオナルド様。もう買わないって言いましたよね!？」

ちよ、ミス、いい笑顔で試着室に押し込まないで、服を脱がせないで！  
これ以上は嫌だって言ってるのにー！！

数時間後。家に帰っていつもの仕事用の服装に戻った私は、キッチンで夕食の準備をしていた。

結局あのあと、服だけじゃなくて靴だの小物類も買いに行っただよな。二人ともリノリで、私は完全に着せ替え人形だった。

……今日だけで、いくら使ったんだろう。

せめて小物とかは自分で払うって言ったんだけど、レオナルド様は聞いてくれなかった。その時のことを思い出すと、ため息と独り言が出してしまう。

「絶対に払わせてくれなかったしな。美味しいご飯で充分おつりがくるとか言われたし……」

そんなことを言われたら、頑張って美味しい夕食を作るしかないよね。でも、今日は疲れちゃったから、少し簡単なものにしよと思う。

底にバターを塗った鍋に、薄くスライスしたジャガイモを、これでもかかってくらい敷き詰める。その上に輪切りの玉ねぎをどっさり載せて、塩コショウを少々。

次にキャベツをたくさん入れてから、ベーコンを並べてもう一度玉ねぎとキャベツを投入する。最後にまたベーコンとチーズをたっぷり重ねたら、あとは弱火でじっくり蒸し焼きにするだけ。

うーん、やっぱり簡単。それに野菜の旨味うまみが基本だから、調味料をたいして使わないのがいい。

「お母さん、おなかすいたー」

「もうちよつとだから待ってね」

足にぴったり張り付いてきたジルの頭を撫でる。

帰ってきた時、ジルはお昼寝中だった。お昼ご飯はシドさんをお願いしていたけど、おやつは用意しておいた方がよかったかも。

鍋をセットし終えてから、私は改めてメニューについて考える。

「ちよつとポリウムが足りないかな」

あつさりさつぱりすぎるよね。うーん、でも、他に肉や魚を使いたくない。だってメインはこれだもの。

「ジャガイモのグラタンでも作るか……」

あれなら簡単だし、ポリウムも問題なさそう。あとはパンをつければ大丈夫で

しよう。

「なに作るの？ ジルもお手伝いできる？」

「うーん、これにはお手伝いはいららないかな」

「えー」

「今から作るから、見てて？」

ジャガイモの皮を剥いて薄切りにしたら、バターをさっと塗ったグラタン皿に敷き詰めて塩コショウ。そこに生クリームを、上のジャガイモが半分覗くかどうかくらいたっぷり注いでオーブンに入れる。好みでチーズを加えてもいいけど、このシンプルさがいいんだ。

塩コショウで引き立てられたジャガイモ本来の甘味と、加熱されて深みを増した生クリームのコクは、下手な味付けをしたら台無しになると思う。

「あとはオーブンで焼くだけ」

「えー!! はやーい!!」

「ね？ お手伝いいらなかったでしょう？」

「ほんとだね。じゃあ、ジルお皿出す」

「一枚ずつゆっくりねー」

てててと走っていく後ろ姿に声をかけるけど、聞こえたかなあ。まあ、最悪、割つてもケガさえしなきゃいいか。

さて、あとは火の番くらいしかやることがないのよね……どうしよう。とりあえず洗った物をやっちゃおう。といっても、たいした量がないからすぐ終わってしまう。

うーん、誰かお喋りに来ないかな？

そんなことを考えていると、急に声をかけられた。

「リリー、ちよつといい？」

「あ、レオナルド様。どうなさいました？」

あら、レオナルド様だ。いくらなんでも、主をお喋りに付き合わせるのには申し訳ないよね……あれ、どうしてレオナルド様、意外そうな顔をしてるんだろう。

「な、なんでそんなにびつくりされてるんですか？」

「いや、いつもの恰好だから」

恰好？ ああ、今日買ったドレスじゃないってこと？

そりゃあ、あんなヒラヒラした服じゃ料理ができないし、汚したくないから着替えたんだけど。

「似合ってたのに」

「もったいなくて、仕事には着られませんから」  
だからその、しょんぼりしないで？

「せっかくレオナルド様から頂いたものですし、汚したくないんです。買い物とか、外に出る時に着させていただきますね」

「ん。でも、本当に似合ってたよ」

「あ、ありがとうございます……」

うわあ、なんだこれ。普通の褒め言葉なのに、なんでこんなにほっぺたが熱くなってるんだろう。

真っ赤になっていくはずの私の顔を覗き込んで、レオナルド様が心配そうな顔をする。

「リリー、熱でもある？ 顔が真っ赤だ」

「ち、ち、違いますから、あの、ひゃんっ!？」

レオナルド様の手が頬に触れた瞬間、変な声が出た。ひゃんつてなによ、ひゃんつて!!

ほら、レオナルド様が驚いちゃったじゃん、なにやってるの私!!

「……ごめんね、リリー」

「な、なにがですか？」

レオナルド様のお顔が、あんまりよろしくない表情になってる。イタズラっ子みたいなな、そういう雰囲気だよ。

「今のリリーが凄く可愛かったから、もう一回見たい」

「嫌ですー!!」

うわーん、火を使っているから逃げられないよー!!

壁際に追い詰められた私に迫るレオナルド様。思いつ切り楽しそうな表情で、目をキラキラさせている。

くそう、なんでさつき顔を赤くしちゃったのよ、私の馬鹿っ!!

「今日はひたすらレオナルド様からかわれた一日でした……つと。よし、日記終わりー」

あのあと、グラタンが焼き上がるまでレオナルド様に散々追いかけて大変だった。今はジルを寝かしつけ、その横でノートに日記をつけている。

というか、本当は育児ノートなんだけど、今日のはただの日記だわ。

まあ、それだけレオナルド様からかわれた印象が強いつてことなのかも。ジルが留守番で、傍にいなかったせいもある。

「それにしても、来月からはレオナルド様のメイドかあ」

王家のメイドを辞めて他のところで仕事をするなんて、自分でもほんの半年くらい前までは想像さえしてなかったよ。

私は元々、王太子夫妻のメイドとして働いていた。レオナルド様の屋敷に来たのも、王太子の仲介があつてのことなんだよね。王家での働きぶりを評価されて「王家のメイド」なんて特別な名称を頂いているんだけど、それをお返しして、レオナルド様の専属メイドになることに決めている。

レオナルド様の傍にいたのが大好きで、ジルの母親であり続けたいと思うし、レオナルド様もそれを望んでくれていた。でも、王家のメイドのままでは、王太子に呼ばれた時に二人から離れなければならない。だからちゃんとジルの母親であるために、王家のメイドを辞めてレオナルド様の専属でいたいと思った。そうしたら、レオナルド様もそれを望んでくれたのだ。

王太子もしぶしぶだったけど、認めてはくれた。順調にいけば、来月には契約が変えられるはず。

うん、こうして仕事のことばかり考えているから、男っ気がなさすぎて母さんに思われるんだよね。

「……あ、考え出したら憂鬱ゆううつになってきた」

連絡するたびに結婚はまだかつて聞かれるのが嫌で、実家にはかれこれ半年以上連絡をしていない。母さん、怒ってるんだらうな。結婚はしていないけど六歳になる娘ができたって言ったら、どんな反応をされるやら。

怒るのか嘆なげくのか、はたまた喜ばれるのか。いずれにせよ、レオナルド様とごり押しで結婚させられそうで怖い。

「結婚かあ」

別に、憧れがないわけじゃないのよね。あの人のことを忘れて幸せになんかなれないから結婚しないつもりなだけで、ウェディングドレスを着てみたいなどは、ちらっと思ふことがあるもの。

だから、ジルが大人になって嫁よめぐなんて運びになったら、一緒にドレス選びとかやりたい。

ジルは、綺麗なピンクがかった金髪に青い目の美少女だから、どんなドレスでも似合っそう。でも、やっぱりオーソドックスな、スカートを少し膨ふくらませた形のドレスを着せたい。

えりもとは大人っぽいスクエア系のえりぐりでも、可愛らしいフリルたっぷりのえり

ぐりでも、きつと似合う。繊細なレースで首まで覆うデザインも素敵だ。

「ジルはどんな恋をするのかな」

できれば、愛し合える相手と結ばれてほしい。レオナルド様の娘であることや、強い魔力を持っていることで困難があるかもしれないけど、母親としては純粋に幸せな結婚であったけれど、確かに恋だった。あの人に、私は今も囚われている。

でも、今の私は幸せだ。神様にだって胸を張って言える。

みんなに、レオナルド様に巡り逢えて、私はとても幸せになれた。私の幸福は確かにこの場所にある。だから、この先もずっとここにいられたらいいのに。

いつかレオナルド様に素敵な女性との出会いがあることを願いつつも、そう思う私がいた。

翌日の早朝。

がたごとと揺れる馬車の中、私はレオナルド様と、ジルを間に挟む形で座っている。

長いベンチみたいなものだからね、馬車の座席って。

今日はかなりの遠出だし、私の実家は下町にあるので、乗り合い馬車に乗ってみた。

レオナルド様は貸し切り馬車を用意してもいいって言ってくれたんだけど、近所に驚かれちゃいそうなので、それは辞退したのだ。

「ジル、気持ち悪くない？」

「にこにこ笑うジルは元氣そうで、ホツとした。馬車で酔っちゃったらどうしようって思ってたのよね。念のために酔い止めの水薬も用意していたけど、使わなくて済みそう。」

ジルの様子に胸を撫で下ろす私に、レオナルド様が声をかけてきた。

「リリーはずっと西の地区にいたんだっけ」

「はい、実家も、お嬢様のお話相手として雇われたお屋敷も西だったので」

私たちが暮らしている王都は、東西南北の地区に分かれている。レオナルド様のお屋敷があるのは東の地区なんだけど、私は十八年間、ほぼ西の地区でしか生活してこなかった。

あ、正確には十五年。お嬢様が王太子妃として城に行ってから、城で生活して……ないな、王太子に潜入調査とか派遣メイドとかであっちこっち行かされたもの。

でも十五年住んでいたし、情報もこまめに入手していたので、やっぱりまだ西の地区

が私の地元って感じた。そのうち、レオナルド様と住む東の地区が地元になるのかもしれない。

「僕はあるまり西には行かないな。時間があれば、案内してくれると嬉しい」

「わかりました」

今日のレオナルド様も、いつものローブじゃなくて、シンプルなシャツとズボンを着ている。ローブに似た丈の長い上着を羽織<sup>は</sup>ってはいるけど、やっぱり普段とは雰囲気が違う。

近寄りたい空気が緩和<sup>かえ</sup>されているおかげか、馬車の中の女性から熱視線が集まっている。わかるよ、レオナルド様かつこいいもの。

「お母さん、あれなあに？ あんなやね、はじめて見るね」

窓の外の光景が気になるのか、ジルが袖を引いて質問をしてきた。

「あれは教会よ。この辺りは西の国の文化も少し入っているから、屋根の形とか装飾が異なるんですって」

「ずいぶんと色が鮮<sup>あざ</sup>やかだね」

屋根のあちこちに下げられた色とりどりの布を眺めて、レオナルド様が感心したように呟<sup>つぶや</sup>く。

「西の国の彩色技法が取り入れられているので、はっきりした色が出るんだそうです。刺繡<sup>しじゅう</sup>なども盛んですよ」

「へえ、じゃありりの刺繡<sup>しじゅう</sup>の腕前はここらなのかな」

「実家にいた頃、近くに住んでいた奥<sup>おく</sup>様が西国の方で、刺繡<sup>しじゅう</sup>の手ほどきをしてくださいましたんです。娘さんが欲しかったとかで、実の娘のように可愛<sup>あい</sup>がっていただきました」

懐<sup>なつか</sup>しく思いつつ答えると、レオナルド様も窓の外を眺めながら言葉を続けた。

「そう……この辺りは治安がよさそうだね。警備は西の詰所<sup>しじよ</sup>？」

「そうですね、第四兵隊の新人が見回りをしています。宿が多いので、旅人の確認も兼ねているそうですよ」

王都の警備の兵は東西南北と、王城近辺<sup>に</sup>を担<sup>にな</sup>う中央の五つに分けられている。その中でさらに細分化されて、それぞれに兵隊を持っているんだよね。西は第六兵隊まであり、この辺りの管轄<sup>かんかつ</sup>は第四兵隊。隊長は西の国と盛んに交易する大商家の三男だったような……さっぱりした気風<sup>きふう</sup>で、町の人からも信頼されるいい隊長さんだったはず。

「そっか」

どことなく安心した様子のレオナルド様に首を傾げる。刺繡<sup>しじゅう</sup>から治安<sup>しんあん</sup>についてなんて、かなり急な話題転換<sup>た</sup>だったけど、なにか気になることでもあったのかな？

すると、レオナルド様が微苦笑を浮かべた。

「ああ、ごめん。最近、北の地区で魔法らしき痕跡こんせきが見られる事件がいくつか報告されているんだ。魔法が使用されたらしくて、ケガ人も出ている。それを思い出して、西はどうかのなかって気になった。魔法省でも捜査そうさしているから、なにか手がかりがあればと思つて」

「そんな事件があつたんですか。この辺りのことなら、第四兵隊の隊長さんがよくご存知だと思ひます。ここの出身で、顔が広い方なので。後日、お仕事に戻つたら確認してみてください」

「ん、そうする。ありがとう、リリー」

「いえ、お気になさらず……あ、そろそろ降りますよ」

おっと、話し込んでいて乗り過こしちゃうところだった。近くで停めてもらつて、あとは歩き。ここまで来ればそんなに遠くはない。

それにしても、魔法の痕跡こんせきがある事件が……北の地区はずいぶん物騒なんだね。

そんなことを考えながら歩いていると、ふいに声をかけられた。振り返れば、そこには顔馴染みのおばさんが立っている。

「あれ、リリーちゃんかい？ 別嬪べっぴんさんになつたねえ!! そのドレスも、素敵じゃ

ない」

「こんにちは、おばさん。そう？ 服に着られちゃつてない？」

「全然、年頃のお嬢さんらしくて、よく似合つてるよ」

「ありがとう」

褒められた。嬉しいな、これ昨日気に入ったピンクと茶色のドレスなんだよね。髪は服と同じ色のリボンで、横でひとつに纏まとめている。少し大人っぽすぎたかなと思つただけ、たまにはね。レオナルド様に、違う髪形をってリクエストされたことだし。

ちなみに、ジルの服装は若草色の可愛いワンピース。髪はツインテールにしてみた。可憐かれんなお嬢様風の出で立ちで、馬車の中で他の乗客から「可愛い」って声をかけられていたほどだ。

おばさんに会釈えしゃくしてまた歩き出すと、レオナルド様が訊ねてきた。

「知り合ひ？」

「はい、この辺りは結束が強いので、町内みな顔馴染みのようなものです。先ほどの方は、私に食材の目利きを教えてくださいましたお店のおかみさんです」

私にとって、この地域の方々はみんな先生みたいな存在。生きていく知恵も、刺繡ししゅうや目利きなどの技量も、全部色々な人から教わつたものだ。どれひとつ欠けても、王家の

メイドと認められるリリー・ルージャにはなりえなかった。

「あ、ここが私の実家です」

「ここが……」

建物そのものは街並みと調和する、二階建てのこぢんまりとした店構え。一階は母さんの営む料理屋で、二階が居住空間。正面から見るとちよつと狭そうに見えるかもしれないけど、奥行きがあるから結構広い。ちなみに料理屋の上には宿泊スペースも二部屋だけあって、料理屋から直接階段を上つていくんだ。家族の居住スペースには鍵がかかっていて、店側からは入れないようになってる。居住空間には脇の細い道を通つて裏口からしか行けない造りなんだよね。小さい頃は裏庭でよくお兄ちゃんと遊んだっけな。

さて、いい加減現実逃避はやめて、覚悟を決めて中に入りましょうか。

「それではレオナル様。私から三歩下がったところでジルと一緒にお待ちください」

「どうして？」

「包丁が飛んでこない保証がありません」

レオナル様の顔が若干引き攣つたけど、事実です。ああ、怖いなー、なにが起こつても仕方ない状況なだけに、うう。

はあ……しようがない。怖いけど、行きますか。

恐る恐る店のドアを開ける。すると、テーブルと椅子が並んだ、思い出深い景色が視界に広がった。汚れが目立たぬよう、壁の色は明るめの茶色。大きな窓がたくさんあるから、昼間は凄く明るい。昔は青だったカーテンは、明るい黄緑に変わっていた。カーテンがそよ風に揺れる光景は、とても爽やか。入りやすそうな店構えだし、店主も女性なので、女性も利用しやすいはず。

ドアに取り付けられた小さな鐘が、カランカランと来客を伝える。そんな中、辺りを見回していたら、奥から懐かしい声が聞こえてきた。

「はい、いらつしや……リリー？」

「……ただいま、母さん」

わあい、初っ端からラスボスだ。明るい金茶の髪をひとつに括り、エプロンを身につけている姿は記憶にあるものと同じ。というより、年月を感じさせない。我が母上ながら相変わらず美人すぎて、直視するのが辛いのですが。お兄ちゃんが美形なの、絶対母さんに似たからだ。

母さんは私を見ると、鮮やかな茶色の目を丸くした。

「……リリーが普通のドレスを着てる!？」

あ、そっち？ 指差されて絶叫されたんだけど。

「なに、リリーってば好きな人でもできた？ 結婚するの？」

「いないし、しないから」

目を輝かせて詰め寄られても、そこは、きっぱりはつきりと否定しなきゃ。じゃないと、そのまま暴走するからね。

「じゃあなんで？ 仕事、クビにでもなった？」

「私がそんなへまをするの？」

「思わないねー。で？」

鮮やかな茶色の目を向けて、母さんが問いかける。素直に言ったら絶対に怒られるけど、ちゃんと一言わなくちゃ。

「紹介したい人たちがいるのと、お願いがあつて」

「……人たち？」

「うん。今、外で待つてもらっているんだけど」

母さんの近くに包丁はないねよし。あとはテーブルとか椅子さえ投げられなければ大丈夫かな。

「今の主と、私の娘なんだ。話すとき長いんだけど、娘の父親はその主で……」

「詳しく聞こうか。呼んどのいで」

私の話を遮った母さんの目が、すっかり据わっている。

「わ、私にはキレていいけど、二人にはキレないですよ？」

「なんで？ 可愛い娘に手をつけて子供を生ませたような男にキレたらいけないの？」

「いや、産んでないから」

きっぱり言い切ったら、わけがわからないって顔をされた。

ああ、うん。ちゃんと話すから、とりあえず落ち着いて。

「両親から愛されなかった女の子を、主が引き取ってね。主には恋人も奥様もいないから、母親代わりとして私が雇われたのよ」

「どうして結婚相手を探すんじゃないの、メイドを雇うのよ」

「主は女性が苦手なの。それで、私にお話きたんだ」

「意味がわからないわよ。なんでリリーならいいわけ？」

「私なら、主に恋愛感情を一切抱かないだろうって。今までのメイドが全員、主に色仕かけする人たちだったらしくて」

あ、母さんがなんとも言えないって表情になった。正直、私も初めて聞いた時は似たような顔になったけど。

「あんた、それだけ魅力的な男性にも無反応なの？ それ、女としてどうなの？」

「母さんはどうして、なんでもかんでも恋愛に結びつけたがるの？」

「母親だから心配してるんでしょが!! いい歳して、いつまでも仕事ばかりで好いた男の一人もいないなんて!!」

「仕事に集中してなにが悪いの!! 母親だからって、人の人生にいちいち口出ししないで!!」

「するわよ、親だもの!! 大体、あんたねえ!!」

ああ、どうせまた、女ならってあれこれ言われるんだ。母さんの考える幸せを押し付けられたって、私は幸せになれないのに。

グツと唇を噛み締めた時、ふわりと頬を風がくすぐる。反射的に振り返ると、ドアがゆっくりと開くところだった。

「リリー？」

「お母さん、だいじょうぶ？」

ドアを開けて入ってきたレオナルド様とジルを見た瞬間、涙腺が緩む。

「大きな声が聞こえてきたから、心配になって」

「大丈夫です……すみません、ご心配をおかけして」

「家族を心配するのは当たり前。気にしない」

微笑むレオナルド様とは対照的に、心配そうな顔で抱きついてくるジル。

「ほんとに、だいじょうぶ？」

「大丈夫よ」

ポンポンと背中を撫でたら、ジルがふにやりと笑う。その顔を見ただけで、さっきまでのイライラはどっかにいっちゃんあった。

「母さん、紹介します。私の主のレオナルド・マリエル様と、レオナルド様の養女で私の娘のジル。今の私の、大切な家族だよ」

母さんは咄嗟のことに反応できなかつたようで、私が言い切つてしばらくしても、なにも言わない。なんでそんなにぼかんとしているんだろう。

「母さん？」

呼んで返事を促したら、母さんは驚いたような顔のまま、レオナルド様とジルをまじまじと見つめて口を開く。

「あ、ええと……主と娘だっけ？」

「うん。それがどうかした？」

いや、だから、どうしてそこで口ごもるのよ母さん。



「あなたに似てない娘ねえ」

「まあ、血は繋がっていないからね。ジルが美人さんなのは、神様に感謝するよ」

きつと、とりあえず文句を言おうとしたものの、言うことが見つからなかったんだな、これは。いいんだけどさ、ジルが平凡な私に似ていない美人さんなのは事実だし。

「可愛いでしょう？ ジル、ご挨拶は？」

「あ、えと、ジルです。よろしくおねがいます」

ああ、言い終わるなりレオナルド様の陰に隠れちゃった。でも、ちらちらと顔を覗かせているのが、おかしいやら可愛らしいやら。

「はじめまして、リリーの母君。レオナルド・マリエルと申します」

「あ、あら、ご丁寧……」

母さん、レオナルド様にちょっとドギマギしてる。いつも泰然としている印象が強かったから、結構意外。レオナルド様がかっこよすぎるからかな？

少し緊張していた様子の母さんだったけど、なにかに気付いたのか首を傾げた。

「ん？ レオナルド・マリエル？ 若き隠者と同じ名前？」

あ、聞き覚えがあったみたい。レオナルド様、有名人だもんなあ。レオナルド様の代わりに、私が頷いて答える。